学　会　記　事

第77回新潟内分泌代謝同好会

日　時　　平成14年4月6日（土）
　　午後2時
会　場　　万代シルバーホテル4階
　　千歳の間

Ⅰ．一　般　演　題

1　Cibenzolineによる低血糖の一例

霜鳥　正明・戸谷　真紀・五十嵐智雄
宗田　　聡・長沼　景子・鈴木亜希子
金子　　晋・鈴木　克典・中川　　理
山浦　正幸・鴉塚　　隆・相澤　義房
新潟大学大学院内部環境医学講座内分泌代謝分野

本例は糖尿病にて経過観察中に急性心筋梗塞、発作性心房細動を発症した一例で，Cibenzoline開始後より低血糖が生じ，低血糖時のインスリンは13μU/mlであった．このためCibenzolineによるインスリン分泌刺激を介した低血糖と考え，投与を中止した．その後，低血糖は認められていない．Cibenzolineによる低血糖は，K_{ATP}チャンネルを抑制するため生じると考えられており，通常の投与量，治療域血中濃度でも生じることが報告されている．本例は高齢で且つ腎機能低下が存在するためCibenzolineの血中濃度が上昇したと考えられる．Cibenzolineによる低血糖について若干の考察を加え報告する．

2　MRIにて下垂体柄の腫大が認められた中枢性尿崩症の2例

渡部千佳子・宮腰　将史・鴨井　久司
金子　兼三・山下　慎也*
本山　　浩*・関原　芳夫*
外山　　孚*
長岡赤十字病院内分泌代謝科
同　脳外科*

尿崩症は従来，大部分が特発性とされてきたが，近年MRIにより，特発性の中に器質的疾患が多数存在することが明らかになっている．今回我々は，MRIにて下垂体柄の腫大を認め，対照的な経過をたどった2症例を経験した．2症例とも発症時は中枢性尿崩症のみで，下垂体前葉機能は保たれていた．各種検査より脳腫瘍は否定的で，DDAVPによる対症療法を行っていたところ，症例1では下垂体柄腫大の改善を認め，バゾプレシン分泌の回復も認めたが，症例2では増大し，FSH，LHの分泌障害を認めた．軟性内視鏡による生検により，Langerhans histiocytosisと診断し，低線量照射により下垂体柄の腫大は改善したが，下垂体前葉，後葉ホルモンとも補充療法を必要とした．2症例はMRIで下垂体柄腫大が認められたとき，障害を最小限にするためにも早期の組織診断が必要であることを示唆しており，侵襲の少ない生検技術の開発ならびに普及が望まれた．

3　ステロイドと放射線の併用療法が有効であったバセドウ眼症の1例
― 当科での治療成績中間報告 ―

相場安希子・金子　　晋・五十嵐智雄
宗田　　聡・長沼　景子・鈴木亜希子
戸谷　真紀・鈴木　克典・中川　　理
相澤　義房
新潟大学大学院内部環境医学講座内分泌代謝学分野

症例は79才女性．2001年3月頃より手指振戦，両眼の眼球突出，複視を自覚，6月近医にてバセドウ病の診断でメチマゾールを開始された．10月頃より眼球突出，複視が著名となり11月当院紹